

# 若者の雇用問題

玄田 有史

東京大学社会科学研究所助教授

## ● 「ニート」とは

ニートという言葉はどこからでてきたのでしょうか。1998年にイギリスでブレア政権が成立し、内閣府の中に「Social Exclusion」、社会的排除防止局と呼ばれる部局が設立されました。社会的な排除とは文字通り社会の中でうまく溶け込んでいくことができない人たち、特に若者たちで、具体的に失業者、ホームレス、ドラッグ、犯罪を繰り返す人々、そういう人々を総称しています。

そして「Social Exclusion Unit」を作って色々と調査をしました。1999年の「Social Exclusion Unit」の報告書に「Bridging the Gap」、格差があるところに架け橋を作る、という項がある。そこには、16歳から18歳の若者のうち、学校にも行っていない、仕事に就いているわけでもない、特別な職業訓練を受けているわけでもない「Not in Education, Employment, or Training」という若者た

### げんだ ゆうじ

1964年生。東京大学大学院経済学研究科退学。学習院大学教授等を経て現職。経済学博士。著書に『ニートフリーターでもなく失業者でもなく』『仕事のなかの曖昧な不安』『ジョブ・クリエイション』などがある。

ちが16万人ぐらいいたことが指摘されています。

その人たちは、20歳以降になってもやはり仕事をしていない。社会的に厳しい状況があって、そういう人たちが年々積み重なっていくと、将来的には失業に関する手当てだけではなく、生活保護、犯罪等を含めると社会的に多大なコストになるわけです。こういう人たちをどうすればいいのか。いろいろ失業対策をしても、そういう人たちはなかなか職に就けない。そういう現実があるわけです。そういう若者たちのことを頭文字をとって「NEET (ニート)」と呼びました。

そういう若者たちが非常に多いということ、当時の、日本労働研究機構の報告書の中で指摘がされました。その報告書に私はショックを受けました。

## ● 日本も同じ

なぜショックを受けたかと言いますと、日本でも同じではないかと。もちろん、犯罪とかホームレス、ドラッグまでとは思いませんでしたが、書いてある内容が非常に近い。どういうことが書いてあるかと言いますと、数字だけでなくいろんな意味で問題を抱えていて、たんに職業能力が欠けているだけではなくて、もっと根本的なところに非常に大きな問題があるということです。

日本でも、若者に関する問題がここ最近、急速

に注目を浴びるようになってきました。90年代後半、特に金融不況直後に中高年の雇用不安というのが非常に大きく議論された時に比べますと、様変わりしています。いまや若者問題が大きな社会問題になり、ご存知の通り、「若者自立挑戦プラン」という形で文部科学省、厚生労働省、経済産業省に内閣府を加えた政府連携で若者問題に取り組むまでとなって、来年度もその強化が04年6月の経済財政諮問会議の骨太方針でも示されました。

たとえばその中で「ジョブ・カフェ」などというのが全国で作られ、ワン・ストップ・サービスというのが売り物で、そこに行けばあらゆる職業に関する情報や相談が受けられる。これからどう評価されるかですが、ある部分ではうまくいくだろうと思います。仕事に就きたい、けどなかなか自信がない、相談相手がいないという人がそこに行って、いろいろな相談を受けてうまく職業につく。

ただ、そういう職業相談を受けるということすら諦めている、ハローワークにももちろん行かない、そういう若者たちが非常にたくさんいるのではと統計データからもなんとなく感じておりました。そんなことを思いながらある時、総務省の労働力調査を見ていると、15歳から24歳の若者のうち、非労働力と言われる人たちがたくさんいて、もちろん大部分は学校に行ったりしているわけです。ただ学校に行っているわけでもない、仕事もしていない、職探しもしていない、失業者でもない、そういう人たちが2003年の春時点で89万人ぐらいいる。97年にはそれが60万人ぐらいで、60万人から70万人、90万人と増えてきました。しかもその中には、働くことに対して働くという希望を持っていない若者たちが、2003年の時点で40万人もいることが明らかになった。

もう一度言いますと、15歳から24歳で非労働力、働いてもない、職探しもしていない、学校にも行っていない、浪人でもない、そういう人た

ちが89万人いて、そのうち40万人は働くことも希望していない、もちろん職探しもしていない、こういう人たちが急増しているのです。97年にはそういう人たちが8万人しかいなかったのが、2003年には40万人。たった6年間で5倍になっているわけです。

## ● フリーターは問題か

若者問題といえますと、フリーターとか失業に関することが議論になりますが、私はフリーターはそんなに問題ではないという感じがしています。ロナルド・ドーアさんを招いた国際会議で、席上、日本の元経営者だった方が、日本では若者問題が大変なことになっていて、フリーターという無業者の問題がかなり深刻な問題になっていると外国の方に説明されたときには、私はちょっと待ってください、といいたい気持ちになりました。

フリーターとは、ご存知の通りリクルート社が作った造語でして、正確に具体的な定義というのはありません。厚生労働省は217万人と言い、内閣府では417万人と言う。なぜそんなに数字が違うのかと細かくは言いませんが、ことほどいろいろな定義があるわけです。ただ共通するのは、働いていて、特にパートやアルバイトで働いている人たちが中心をなしているのがフリーターである、と。

パートやアルバイトなどを繰り返すと、単純労働が多く具体的にはマニュアル労働が多くて、そういうところで働いていても職業技能は身につかない、マクロ的に見ても生産性の改善につながらない、非常に由々しき事態などといわれたりします。ところが、いろんな調査をしてみますと、フリーターはそんなに単純労働ばかりかというと案外そうではありません。マニュアル労働だと言われるかもしれませんが、マニュアルさえあれば誰でもできる仕事というのはそうありません。

例えばファミリーレストランとかコンビニ、フ

ランチャイズチェーンでは、確かにマニュアルはありますけれども、それは初歩のうちであって、マニュアルさえあれば誰でもできる仕事というのはそう多くない。

同じような品揃えをしても、儲かっているコンビニと儲かっていないコンビニがある。違いは、立地条件は確かに大きいのですが、もうひとつ、明らかにオーナーとか店長がフリーターを一生懸命育成している、そんなコンビニにはやはり儲かっているわけです。ちゃんと店長がアルバイトやフリーターに任せられるような環境を作っているところでは、多少のトラブルがあっても何とかなるように、いろんな意味で育成している。

フリーターでもちゃんと育成すれば、何とかなる。もちろん、不安定だと言われますが、週30時間以上働けば、雇用保険の加入もあるわけですし、フリーターだから労災はないよなどと言う事業主もいないわけではないですけど、それはそれとして法律によってちゃんと排除しなければならない、フリーターだってある程度の知識を持っていれば何とかなるわけです。

## ● ニートへの誤解

しかし、ニートの場合は、働いていませんから、フリーターにもなっていない。失業者のように職探しもしていません。ニート本人は非常に苦しい。この点、私としてもしんどいなと思いつつも機会あるごとにお話しているのは、社会の中に大きな誤解があるということ、認識しているからであります。この前も、無業者が52万人いるという厚労省の労働政策研究所の報告が、ずいぶん新聞等でも大きく取り上げられました。「ニート52万人」と大書きした新聞もありました。見出しには「働く意欲のない若者が52万人もいる」とか「働かない若者が52万人いる」とか、「働く意欲の欠如が由々しき事態である」というようなことが書かれているわけです。

しかし、私が『ニート』という本を書く時にいろんな取材をした際、働くことを根本から否定している人たちはほとんどいない。確かに口では無理して働かなくてもいいというけれども、現状のままでもいいと思っている人たちはほとんどいない。ニートはパラサイトシングルの特にひどいケースだと言われていることもある、経済的にやはりお金がなくて親と同居せざるを得ないんですが、親に甘えて気楽に過ごしておけばいいと思っている人たちは、ほとんどいません。親が永遠に生きているなんて誰も思っていないわけで、けれども、どうしようもない。自分では動き出すことができないのです。

ニートの人たちは、“いっぱいいっぱい”とよく言います。これは、ニートだけではありません。20代から30代の前半の人たちは、何かにつけ“いっぱいいっぱい”と言います。何にいっぱいいっぱいになっているかという、基本的には人付き合い、人間関係にいっぱいいっぱいになっています。表面には余り出しませんが、けれど非常に人付き合いがしんどいと思っています。

最近、養老孟司さんとお会いしたことがありますが、養老さんが朝日新聞のインタビューに答えられた事が非常に印象に残っています。つまり、今の若い人たちの会話というのは、ほとんど人間関係の会話ばかりしている。誰々と誰々がどうしたとか、誰々と誰々の仲が悪いとか。こんなに人間関係、人間関係と言ったらしんどいはずだと。会話の中に自然が、芸術がどうしたとか、そういうのは全然ない。ほとんどが人間関係の議論で、それでは疲れるだろうといわれています。

そして、就職する時にはコミュニケーションスキルが大事だと言われて、人間関係をうまくできることが当然だとか、そういうのが必要だと言われる。コミュニケーションスキルって何ですかと学生に聞くと、ちゃんとプレゼンができて、パワーポイントぐらい使えて、英語で自分の言いたいことが言えるってことですよ、と。とんでも

ない誤解です。私の理解するコミュニケーションスキルとは、上手に自分の言いたいことを喋ることではなくて、人の話を聞けることだと言っています。学生にも就職活動の時にそんなものは必要ないと言っています。うそでもメモしている振りをして、5分に一回はうなづけ、と。

もっと言えば、教育問題にもあります。これから「自己実現」していかなければいけないとよく言います。人間関係の中で、自分がどうする、自分がどうだとか。確かに教育でも自分らしく生きろとか、自分の本当にやりたいことを見つけなさいとか、自分、自分と言われます。我々の世代には、学校時代に余り自己実現などということ言われたことはありません。だけど、今の“いっぱい”世代は、小さい時から自己実現、とか自分らしくということ、ずーっと言われ続けてきています。皆さんも家庭で子どもに言っている可能性があります。自分らしく生きることが大事などと。けれども、それは時には人を追い詰めているのです。

自分らしく生きろとか、個性的になれとか、専門的な能力を自分の力で身につけなさいなどと言われたって、まともな人間には無理です。要領のいい人間はやっていけるかもしれません。何とかかなるさと思える人はいいんです。時にまともな人間が出てくるんです。自分にはそんな人付き合いなどできないかもしれない、いっぱいいっぱいだ、特別なものなどない、自分らしくなんて無理だ、やりたいことがない自分はやはりだめかもしれないと、まともに受け止めてしまう若者たちがいるのです。

引きこもりになる子がその典型で、引きこもりは働く意欲がないどころか、働く意味を問うのです。働く意味って何ですか、と。それがわからない限り、ちょっと動き出せませんと言うのです。まじめなのです。働く意欲がないどころか、働く意欲がありすぎるのです。働く意味とかを過剰に考える。その中で個性がない、人間関係が苦しい

自分はだめかもしれないと思って、結局、立ち止まってしまいます。そして、いったん立ち止まったら最後、苦しくなる、動けなくなるのです。

だから、『ニート』を書いてから、読者から反応があって、正社員で働いている人が「自分も紙一重です。自分も週末はニートです」などと言うんです。みんな人付き合いとか個性重視、しかも自己実現で自分の力でやっていけと。もう疲れきっているんです。けれどやはり世の中はコミュニケーションスキルなんです。面接でもあなたはちばん何がやりたいのですか、自分自身をPRしてくださいなどと言われて、ますます追い詰められる。学校でも職場でも家庭でも個性的であれ、自分らしく生きろと。

## ● 増えた原因

ニートが増えた原因は、1つは、やはり不況の影響が大きかったのではないのでしょうか。就職活動をして一生懸命資格を取ったり、語学の勉強をしたりし、大学でもまじめに授業に出て成績もいはずなのに、面接では落ちて落ちて落ちまくる。そうするとだんだん自分自身が社会に必要とされていないのではないかと思ったりするわけです。これは大きかったと思います。若い人に働く意欲がないなど言うけれども、こういう状況の中でちゃんとした精神状態を保つのがいかに大変か。人によっては、自分はもう必要とされていないと思うようになるんです。不況の影響はやはり大きいらしいと思います。

2つ目は、教育制度の影響があったかかもしれないと思います。これは東京大学の荻谷剛彦さんのインセンティブ・ディバイドという言葉にだいぶ影響されているんですけれども、今、ゆとり教育とか個性重視教育の中で明らかに意欲の格差が広がっています。個性的であれ、自己実現を目指せと言われて、やれるぞ、やっていく、がんばろうと思えるグループと、無理だよ、そんなこと言わ

れたってと諦めてしまうグループとに、はっきり分かれてきています。諦めてしまうグループは勉強もしない、今の状態でいいと思っている。今の状態でいいと思って学校生活を送って卒業した後に、それがどうにもならないと気づく。そこで諦めてしまう。もうだめだと。もしかしたら、教育制度の中で個性とか自己実現とかを強調したことが、もちろん良い部分もあったでしょうが、一部の若者たちを追い詰めていた可能性があるのではないのでしょうか。

3つ目は、家庭環境、地域環境という問題が大きいと思います。やはり人づき合いが苦しい。引きこもりとか不登校とかニートの子を支援するあるNPOの人が言うには、ニートに共通するのは、社会経験に穴が開いている、と言うんです。ほつきかりと欠けているものがあると。それは、ちゃんと人に挨拶ができない。そんな子たちがたくさんいると言います。子と言っても20代、30代がたくさんいるのです。それは突き詰めると、やはり小さい時からちゃんと挨拶しろと言われていないんです。親でもない地域の大人と交わるなどという経験が決定的にないものですから、急に交われと言われると苦しいんです。

このように、家庭環境、学校の問題、教育の問題、不況の問題がかなり複雑に絡み合っていて、「ニート」と言う問題を引き起こしているように思います。

## ● 価値観の多様化？

よくフリーターが増えた原因で、若者の行動や価値観が多様化したことが一因だと言われていますが、私はきっぱり違うだろうと思います。確かに選択肢は非常に増えたんですけど、逆に選択することがとてもしんどくなっている。ある意味、昔は楽だったのです、選択肢が少なかったから。ラーメン屋さんに入って醤油と味噌、塩しか書いてないので、3つのうちのどれか、で決まった。

今、ラーメンは何十種類もある。選ぶに困った挙句、おすすめと書いてあるのを選ぶ。

選べてないんですよ。もしパウチャー制度をやっても、それこそクリームスキミングみたいなことになります。選べる子だけが上手に乗かって仕事を選べますが、ニートになるような、選ぶこと自体がしんどいという、人付き合いの中で何か自分自身が選ぶこと自体がしんどくて立ち止まっている子は、選べませんから、うまくいかない。

ニート問題を問われたときに、もうひとつは、語り口が大きすぎると、私は考えます。行政がこの問題に乗り出すときに必ず言うのは、将来の労働力不足の深刻化が懸念とか、社会保障制度が維持できなくなる懸念があるので、若い人に働いてもらわないと困る、フリーターやニートや無業者が増えるのは困る、などと文書に書いてあります。けれども、そういう文言は、相当イケてないと私は思います。行政的にはいいかもしれませんが、ニート本人はそれを見て、そうか、これから労働力不足になるのか、年金制度が維持できないのか、じゃ働こうという人はいません。ちょうどそれは出生率が下がってきて1.29になったので、そうか、出生率が低いのか、だったら私も産もうという女性がいらないのと同じです。

マクロの議論とミクロのレベルの意思決定というのが完全に混乱しているのです。

## ● まず高校中退者対策を

ヨーロッパでもこうやれば若年対策がうまくいくという抜本的な薬はない、若年対策はうまくいかない、それがずーっと20年来の歴史です。ただ唯一うまくいく可能性があるとしたら、個別・持続的・集中的支援をどこまでやり続けることができるかでしょう。若年全般に対する対策はうまくいきません。むしろある層に対して持続的・集中的支援をしていくことによって、社会の中で致命的な穴が開くのをふさぐ。たとえばイギリスで

言えば人種の問題、地域の問題。貯金という概念すらもない人たちに対して、まず生活のあり方を含めて持続的・集中的支援をし続けないと、うまくいかないだろうと思います。難しいのは、日本の場合、誰をターゲットにするのか、そういうコンセンサスがなことです。若者全般でやっても、誰にも通じません。

うまくいくとすれば、これは若年対策ではなくて、「私に対する支援策なんだ」と思わせるような仕掛けだったり、そういう表現をしない限り無理だろうと思います。宇多田ヒカルの歌などが100万枚も買われるのは、若者の気持ちを代弁しているからではなくて、「私」の気持ちを何でわかってくれているのと100万人に思わせたからです。

そういう意味で、かなり個別の時代になっています。そういう語り口がなかなかありません。誰に対して集中的な支援を続けていくのかというコンセンサスを作らなくてははいけません。なったらなったで、そうすると必ず、何であいつらばかり優遇するのだとなりますから、最後は政治的な意思決定だと思えます。

日本の場合は、手始めの対策は高校中退者でしょう。今、高校中退者が年間十数万人です。今、全員が高校に行く時代、2007年には全員が大学に入ろうと思えば入れる時代になると言われます。けれど、それはあくまで数の問題であって、現実には高校に行かない人たちも8万人ぐらいいます。中退者と合わせると年間20万人ぐらいいるわけです。この20万人が「ニート」になる確率が極めて高い。高校を卒業したって仕事がないのに、まして自分たちにあるわけがないと思っています。

高校中退者は教育行政と労働行政の手がまったく伸びていないところ。こういう人たちには何の支援もありません。

どういう層に支援をするのか、そこがたぶん一番大きな問題だろうと思います。ニートの問題に

対しては個別・持続的にどう支援していくのか。イギリスのようにパーソナルアドバイザー、かかりつけの医師みたいに、本当に一人ひとり個別に対応してくれるような相手をどう作っていくのが問題だろうと思います。確かに、キャリアコンサルタントとかキャリアカウンセラーというのがありますけれども、人の問題をちゃんと扱えるような人を育てるには、時間も経験も必要です。

高校中退者や中卒のことを考えると、もっと早い段階で働きかけをしないといけないだろうと、私は力説したい。フリーターはそんなに問題はないと思いますが、それでもやはり苦しい時は苦しい。統計がないからなんとも言えませんが、「フリーターは雇用保険に入らないことになっているんだ」とか、「フリーターには労災は出さないことになっている」とか、「悪いよな不安定で、国が悪いんだ」などと言っている事業主がいないとは限らないのです。そういう人たちに対して、学校で教えることは、労働三権について教えるのではなくて、労災にあつて保険が出ないと言われたら、ちゃんと労働者として払われる権利があるからそういう時にはどこに相談に行かなければならないか。都道府県にはちゃんと労働福祉事務所というのがあったり、総合労働相談センターというのがあるから、そこに相談に行け、と。上司からセクハラ受けたら、泣き寝入りするのではなくて、県には雇用均等室というのがあるから、そこに相談に行けば、ちゃんと法的な対応をしてくれる。そういうことを教えないといけないと思うのです。正社員であれば会社の人事労務がやってくれますけれども、フリーターの場合は、労働三権とか何かではなくて実際にトラブルにあった時に、どこに相談に行けばいいか1枚のパウチカードか何かにして、学校をやめたら教科書は捨ててもいいけど、これだけは持ってろ、お守り代わりになるということを教える。それぐらいはやったほうがいいと思います。

けれども、実際にどの県に行つたって、労働問

題に一番詳しい労働局の人間が中学校に行って話をしたという話を聞いたことがありません。教育委員会と労働局が話をしたなんてほとんどありませんから、それぐらいはやったほうがいいと思います。

## ● 顔つきが変わってくる

もうひとつは、中学生ぐらいで働く経験をさせたほうがいいんじゃないかと、本気で思うようになってきました。最近では、全国の中学2年生は130万人ぐらいいるのですが、この中学2年生を毎年11月の第2週に1週間、月曜から金曜日まで、仕事を通じてやりたいことを全員にさせる、そういう1週間にしませんかと言っています。11月の第2週、中学2年生、14歳。皆さんもご経験があるかもしれませんが、大体生まれて初めて補導されるというのが中学2年生の夏休みが多いんです。大概悪さをします。そして11月というのは、学校の先生に聞くと中学2年生は余り担任したくないと言うんです。事件がいろいろ起こるから。補導だけでなく、11月危機という言葉があるんですと言われて、なんか事件が起こるといいます。10月までは運動会とか学園祭があつていろんなガス抜きがあつてうまくいく。12月になると期末試験があつて明確に受験モードに入っていきますから、いい意味でも悪い意味でも開き直ります。11月というのはちょうど何もなくて、その時にいろんな事件は起こるんだと言うのです。逆に言えば、非常に多感な時期なのです。その時期に働くというのはこういうことか、自分でも何とかなるんだと実感を持たせるようなことをしたい。

今、職業教育をやってますよとみんな中学の先生はおっしゃるんです。けれども調べてみると、みんな1日や2日です。クラス全体で工場に行つて職場見学しました、パン工場を見学して質問して、最後に工場をぐるっと回つて、最後にパンを

1個ずつもらつて帰る、楽しかったとは言いますよ。言いますが、それだけです。それで職業意識に目覚める人がいたら気持ち悪い。ただ5日間ぐらいやるとこれが変わるんです。今、学校で5日間やっている学校はほとんどないんですけれども、兵庫県と富山県では、すべての公立中学校に5日間、職業体験をさせているんです。これが変わるんです。月曜日と金曜日とはまったく子どもたちは違う顔をするんです。最初はしんどいなあ、やりたくないなあと思つている。けれどもやつていくと、何か自信をつけて帰ってくるのです。考えてみると、子どもにとって親とか先生以外の大人に出会う機会、しかも5日間も同じ空気を吸う機会って、ほとんどないのです。その中で、いろいろ叱られたり誉められたりすると、ちょっと自信をつけるのです。ちゃんとありがとうございましたと言えば、何とかなるんだというような感じで帰ってくるんです。

## ● 地域の教育力

こういうのを見ると、地域の教育力ってすごいなと思うんです。まず、このぐらいやらないといけないだろう、と。コミュニケーション・スキルを持ってと言う前に、まずはこういう経験をさせないとまずいのではないかと。

けれどしんどいですよ。先生がしんどい。先生の中には名刺を持っていない先生がたくさんいらっしゃいますから、地域の中に溶け込んでいつ自分から頭を下げて、ウチの子、面倒を見てくださいと言うのは、とつてもしんどいんです。特に週休2日制になってから本当に忙しくなりましたので、メンタルでバタバタ倒れているんです。もういいと言う先生も現実にはいます。けれども一方で、やはり子どもたちが変わる、変わるという姿を見せ付けられると、しんどいけれど一生懸命やっているのです。

また地域がどうやってこの問題にサポートする

か。兵庫県の場合は95年の阪神淡路大震災の教訓が大きかったんです。やはり地域が何かやらなければいけないと。その後97年に酒鬼薔薇事件というもうひとつ大きなショックがありました。あの時にまともだったんですね。酒鬼薔薇の少年は中学2年生だったんですけども、やはり異常な子だと言うだけではすまない。こういう子って実は誰でもなるかもしれない。この子が悪いというだけの問題だけではなくて、地域が何ができるか本気で考えようとやったんです。その時に当時の知事の貝原さんが教育長と考えてやるんだとい出した。最初はうまくいくのかなあと思ったんですが、やってみるとうまくいってしまった。親の中でもこんなに1週間も勉強せんと何やらせるんですかといっていたんですが、やってみると子どもが変わるから、その説得力はすごいんです。今は定着しています。

あとはマスコミの力です。兵庫県でも富山県でもNHKのローカルニュースで放送されたりすると、子どもたちの姿が出ますから、すごく盛り上がるんです。

最近、労働組合の人にやってもらうのもいいなと思うようになりました。組合も今いいテーマを探しているはずだから、自分たちの直接利益と関係ないけれども社会のために役立っているんだ、若い人たちのために引き受けてやろうというのは、案外悪くないテーマではないかと思っています。子どもたちのために引き受ける、1週間ぐらい面倒見ようじゃないかと。11月の第2週になるとお祭りです。みんなその1週間はジャージを着て歩き回っていますから。日頃だったら電車の中で注意したいなと思って怖くてできませんが、その1週間はみんな大人が子どもたちに本気で向かい合えますから注意できますよ、楽しい。ムード的にはいいと思います。それをぜひ何とかやれるといいと思います。

ただそれですべてニートの問題が解決するなんてひとつも思っていません。ただ、早い段階で子

どもたちに直接向かい合って、働くというのはそんなに特別なことじゃないんだ、ちゃんと努力すれば何とかなる、そういうことを実感させるようなリアリティを提供するくらいのことはやっていかなければいけないし、案外、ニート問題が問われているのはそういうことじゃないかという気がします。若いやつはだめだとか、働く意欲が弱いとか、そういうことばかり言っても結局だめなんです。個性とか自己実現とかを強調することは、もちろんいい部分もあるが、一方で追い詰めてしまっている部分がある。コミュニケーションスキルだ、自己実現だと言いつけることによって、結局、人間関係でいっばいいいばいだと思う人たちを作ってしまうところがある。過剰な不安感をかきたててしまうところがある。それを一つ一つ絡み合った糸をほぐしていくには、一人ひとりに一つずつ丁寧にやっていくしかないの、そういう意味では個別に支援する人を育成しないといけない。そのためのコンセンサスを作っていかなければいけない、そしてもうひとつは、かなり早い段階で、先ほど述べた11月の第2週のようなことをやっていかなければいけないのではないか、そういう思いをこのニート問題を考えるようになってから強く感じるようになりました。

## ● 世代を超えて共通する課題

もうひとつ、私は本当はあまり若い人のことは知らないんです。若い人のことが専門ではないので。ただ『仕事のなかの曖昧な不安』という本を書いてから、とても感じたことがあるので、それをお話したいと思います。

本を書くときたまにうれしいと思うことがあって、『仕事のなかの……』の読者から、私と同世代のサラリーマンの人から言われたのは、あなたはこんな本でこんなことを書いているけど、働いている人はみんな知っていることばかりだよ、けれど漠然と自分だけそうかなと思ってたことに



根拠があるんだ、ちゃんとデータからも裏付けられるんだとわかったのは良かった、と言われて、力づけられました。

中でも、みんなが漠然と知っていて、けれど根拠がある、書いて一番良かったと思うことは何かというと、“ウィーク・タイズ”という言葉だったのです。ウィークは“弱い”、タイズは“絆”、“弱い絆”。それは何かと言うと、これから転職とかをする時に一番大事なものは、資格とか専門的な技能とか語学力ではなくて、たまにしか会わないけれどたまに会うと信頼して話ができるような人間関係、そのぐらいの人間関係を持っている人間が結局転職してもうまくいっているんだと書きました。転職するとき相談する相手が、いつも会社で飲んでいた仲のいい同僚とか、奥さんとか、あるいは自分だけで決めても、余りうまくいかなくて、たまにしか会わない友達、学生時代とか、昔の取引先で付き合っただけで最初はぶつかったりしたけれども最後は打ち上げて乾杯なんかしてそれから何となく薄いけれど関係が繋がっているとか、そういう人たちとのつながりで、ちょっと喋るとか、助言もらって転職を決めた人のほうが結局うまくいっている。これからは、そういうたまにしか会わないぐらいの、ゆるやかな人間関係を持っていたほうが有利だ、それは転職だけではなくて独立する時も、そういう人間関係がないとうまくいかない、と。

逆にいえば、日本社会というのは“ストロング・タイズ”だったのかなど。ずーっと強い人間関係を大事にしている、会社の中でいつも会っている仲間を大事にしている。それが今だんだん破綻をきたして、“ストロング・タイズ”も大事だけれども“ウィーク・タイズ”を作らなければいけないとみんな漠然と思ったことに意味があるのだ、と書いたことがすごく励まされたと言われました。これにはびっくりするぐらいの反響がありました。

考えてみると、若い人たちも人間関係が希薄ど

ころか非常に“ストロング・タイズ”の社会の中に生きています。電車の中で一生懸命、ゲームとかメールを打っています。誰に打っているのかというと、10人に打っている人はほとんどいなくて、大体2、3人で1人、2人なんていう人がたくさんいる。同じ人にずーっとメールを送っている。それで何をしているかというの特にない。いわば存在確認している、つながっているということを確認したいんです。やはり不安が多いから自分のことをそれこそオンリー・ワンだと認めてくれる、そういう人間関係を非常に大事にしているんです。

非常に“ストロング・タイズ”の人間関係に生きています。勉強しない。勉強しない分、一生懸命メールを書いているんです。大事な友達に関係が切れないように、一生懸命“ストロング・タイズ”の人間関係を強く持ち続けようと思っています。確かに安心感があります。自分のことをオンリー・ワンだと認めてくれる安心感がありますけれども、先につながる可能性は少ないと言えます。自分のことを認めてくれる存在は、自分と同じような情報や自分と同じような価値観の中に生きているから安心感はあるんだけど、本当の自分に向いていることとか、自分が何をやればもっと輝くかなどという、そういうことがわかる環境にはない。

たまに会うぐらいの人間関係では自分と違う世界に生きているから、自分にはない情報を持っています。そういう人たちと会って話したりするほうが、だったら自分にもできるかもしれないとか、こんなことは憧れでやっばり自分には無理かもしれないとか、現実的・客観的な判断ができる。たまに会うけど、ゆるやかな信頼関係につながる人間関係を持たないといかんですよと言うと、聞きたくないなあと思った若い人たちも、そこだけは明らかに反応が来るんです。

社会学では「弱い紐帯」と訳しているんですが、紐帯なんてそんな古い言い方をしないで、“ウィー

ク・タイズ”という言葉で十分いい。組合も、どちらかというとは本当は”ストロング・タイズ”の組織かもしれないが、一方でゆるやかなつながりになるようなことを目指したほうがいいと違いますかと、たまに言ったりします。

では、これをどうやって作るのかといういろいろな難しい問題もあるのかもしれませんが、たとえばこんなことがヒントだろうと思います。東京・杉並区の和田中学校長の藤原和博さんが言っていたのは、彼がリクルートの営業マンだった時に一番いやだったのは、挨拶のはがきをもらおうと大体両面印刷でひとことも言葉がない、あれはいやだなと思ったと言います。自分はどんなに忙しくても、はがきとかを送る際は必ず2行から3行くらい手書きで、久し振りに飲みませんかとか、あれはどうなりましたかとか書くようにしていたと言うんです。書いたから何か変わるわけではないんですけど、時々たまに手書きの反応が返ってきて、その手書きの反応が100枚たまると、必ず何か動き出すという実感があると言います。

私は、そういうのが“ウィーク・タイズ”を作るという意味ではないかと思います。実際リストラで転職するときの決め手が年賀状だったなどという話が案外ある話で、たまに会うけどゆるやかな人間関係をどうやって作るのかというのが課題だと思います。

若者たちに向かい合うのも、われわれが若者たちにとって異物であるからいいのです。違和感のある人間にたいして、若者たちもあえて理解する必要はないと思っています。お互いにわからない存在でいいと思っています。逆にだからこそいろんな可能性があるんだと。たぶん11月にやっていたいろんなトラブルが起こりますよ。けれども、そのトラブルこそがもしかしていろんなことを生み出すエネルギーになったりするとか、自分とは違う人間とゆるやかにつながるきっかけになれば、それが大きく将来につながっていくことになるのかなと思っています。■

(本稿は、04年9月29日、生活研の第33回政策研究会での玄田氏の報告を本誌編集部での責任でまとめたものです。)

